

抗酸化食品の摂食が腸管の免疫細胞の代謝に与える影響

代表研究者 増田 潤子
岡山大学 大学院 自然科学研究科 助教

研究要旨

がん移植マウスはがん局所だけでなく全身の免疫状態も変化する。しかしこれまでに得られているがん研究のほとんどは、大腸癌細胞をマウスに移植した人工的なモデルにすぎないため、前がん状態で早期診断および治療を求められる臨床において有意義な知見を得ることはできない。本研究では、炎症性腸疾患由来発がんモデルマウスに抗酸化物質を摂食させた時の大腸の肉眼的所見および免疫担当細胞の変化を解析した。大腸がん誘発剤アゾキシメタン(AOM)およびデキストラン硫酸ナトリウム(DSS)飲水によって誘発させた BALB/c 系統野生型マウスの大腸の発がん数は、抗酸化物質摂取群で有意に減少した。また、脾細胞の抗腫瘍免疫は抗酸化物質摂取群で有意に高かった。これらの結果は、抗酸化物質の摂取によって大腸がんを抑制できる可能性を示唆した。